竜潭譚

泉鏡花

青空文庫

躑躅か丘

日は午なり。あらら木のたらたら坂に樹の蔭もなし。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、ただ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき処に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左、躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。

空よく晴れて一点の雲もなく、風あたたかに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯かで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢おり来れり。眉太く、眼の細きが、向ざまに鬟巻したる、額のあたり汗になりて、のしのしと近づきつつ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞ危ないぞ。」

といひずてに眦に皺を寄せてさつさつと行過ぎぬ。

見返ればハヤたらたらさがりに、その肩躑躅の花にかくれて、髪結ひたる天窓のみ、やがて山蔭に見えずなりぬ。草がくれの径遠く、小川流るる谷間の畦道を、菅笠冠りたる婦人の、跣足にて鋤をば肩にし、小さき女の児の手をひきて彼方にゆく背姿ありしが、それも杉の樹立に入りたり。

行く方も躑躅なり。来し方も躑躅なり。山土のいろもあかく見えたる。あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に帰らむと思ふ時、わがゐたる一株の躑躅のなかより、羽音たかく、虫のつと立ちて頬を掠めしが、かなたに飛びて、およそ五、六尺隔てたる処に礫のありたるそのわきにとどまりぬ。羽をふるふさまも見えたり。手をあげて走りかかれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五、六尺ばかりのところにとまりたり。そのまま小石を拾ひあげて狙ひうちし、石はそれぬ。虫はくるりと一ツまはりて、また旧のやうにぞをる。追ひかくれば迅くもまた遁げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラキラとささやかなる羽ばたきして、鷹揚にその二すぢの細き髯を上下にわづくりておし動かすぞいと憎さげなりける。

われは足踏して心いらてり。そのゐたるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と呟きざま、躍りかかりてハタと打ちし、拳はいたづらに土によごれぬ。

渠は一足先なる方に悠々と羽づくろひす。憎しと思ふ心を籠めて瞻りたれば、虫は動かずなりたり。つくづく見れば羽蟻の形して、それよりもやや大なる、身はただ五彩の色を帯びて青みがちにかがやきたる、うつくしさいはむ方なし。

色彩あり光沢ある虫は毒なりと、姉上の教へたるをふと思ひ出でたれば、打置きてすごすごと引返せしが、足許にさきの石の二ツに砕けて落ちたるより俄に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒虫をねらひたり。

このたびはあやまたず、したたかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくぐりて小砂利をさそひ、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。

袂のちり打はらひて空を仰げば、日脚やや斜になりぬ。ほかほか

とかほあつき日向に唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむず痒きこと限りなかりき。

心着けば旧来し方にはあらじと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけゐたり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅せまく、うねりうねり果しなきに、両側つづきの躑躅の花、遠き方は前後を塞ぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの真蒼き下に、彳むはわれのみなり。

鎮守の社

坂は急ならず長くもあらねど、一つ尽ればまたあらたに顕る。起伏あたかも大波の如く打続きて、いつ坦ならむとも見えざりき。

あまり倦みたれば、一ツおりてのぼる坂の窪に踞ひし、手のあきたるまま何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出来たり。くといふ字も書きたり。曲りたるもの、直なるもの、心の趣くままに落書したり。しかなせるあひだにも、頬のあたり先刻に毒虫の触れたらむと覚ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦りぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思ふに、俄にその顔の見たうぞなりたる。

立あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透かで躑躅咲きたり。日影ひとしほ赤うなりまさりたるに、手を見たれば掌に照りそひぬ。

一文字にかけのぼりて、唯見ればおなじ躑躅のだらだらおりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでかかくてあらむ、こたびこそと思ふに違ひて、道はまた蜿れる坂なり。踏心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得堪へずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きてゐつ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある処に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あざやかにぱつと茜さして、眼もあやに躑躅の花、ただ紅の雪の降積めるかと疑はる。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄せば、遥に滝の音聞えたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴えたる声の幽に、

「もういいよ、もういいよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ図なることを認め得たる、一声くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やうやう心たしかにその声したる方にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰おろせば、あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷ひたる紅の雪のなかをばのがれつ。背後には躑躅の花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内の手洗水のあたりを籠めたり。柵結ひたる井戸ひとつ、銀杏の古りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀あり。こなたは裏木戸のあき地にて、むかひに小さき稲荷の堂あり。石の鳥居あり。木の鳥居

の左の柱には割れめありて太き鉄の輪を嵌めたるさへ、心たしかに覚えある、ここよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。ただひとへにゆふ日照りそひたるつつじの花の、わが丈よりも高き処、前後左右を咲埋めたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅と、紫と、青白の光を羽色に帯びたる毒虫のキラキラと飛びたるさまの広き景色のみぞ、画の如く小さき胸に炙がかれける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いふことを肯かで一人いで来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあはせていひまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に帰らむとはおもはず。ひとり境内に彳みしに、わツといふ声、笑ふ声、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる児の五、六人前後に走り出でたり、こはかくれ遊びの一人が見いだされたるものぞとよ。二人三人走り来て、わが其処に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、かたゐといふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。児どもが親たちの家富みたるも好き衣着たるはあらず、大抵跣足なり。三味線弾きて折々わが門に来るもの、溝川に鰌を捕ふるもの、附木、草履など鬻ぎに来るものだちは、皆この児どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒めつ。さるに町方の者としいへば、かたゐなる児ども尊び敬ひて、頃刻もともに遊ばんことを希ふや、親しく、優しく勉めてすなれど、不断はこなたより遠ざかりしが、その時は先にあまり淋しくて、友欲しき念の堪へがたかりしその心のまだ失せざると、恐しかりしあとの楽しきとに、われは拒まずして頷きぬ。

児どもはさざめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳してさがすものを定めしに、われその任にあたりたり。面を蔽へといふままにしつ。ひツそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる滝の音どうどうと松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いよ、もう可いよ。」

と呼ぶ声、谺に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際襲ひ来れり。大なる樹のすくすくとならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。

声したる方をと思ふ処には誰もをらず。ここかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また旧の境内の中央に立ちて、もの淋しく瞋しぬ。山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音しつ、閧としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき児どもなれば、かかる機会を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまま密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをとふと思ひうかぶに、うちすてて踵をかへしつ。さるにても万一わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくることを得ざるべし、それもまたはかりがたしと、心迷ひて、とつ、おいつ、徒に立ちて困ずる折しも、何処より来りしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく

掃いたる土のひろびろと灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍にゐて、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、その手を懐にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「こちらへおいで。こちら。」

といひて前に立ちて導きたり。見知りたる女にあらねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで、隠れたる児のありかを教ふるとさとりたれば、いそいそと従ひぬ。

あふ魔が時

わが思ふ処に違はず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突あたりに小さき稲荷の社あり。青き旗、白き旗、二、三本その前に立ちて、うしろはただちに山の裾なる雑樹斜めに生ひて、社の上を蔽ひたる、その下のをぐらき処、孔の如き空地なるをソとめくばせしき。瞳は水のしたたるばかり斜にわが顔を見て動けるほどに、あきらかにその心ぞ読まれたる。

さればいささかもためらはで、つかつかと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉堆く水くさき土のにほひしたるのみ、人の気勢もせで、頸もとの冷かなるに、と胸をつきて見返りたる、またたくまと思ふ彼の女はハヤ見えざりき。何方にか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はず※呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきものゐて人を惑はすと、姉上の教へしことあり。

われは茫然として眼を※りぬ。足ふるひたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左手に坂あり。穴の如く、その底よりは風の吹き出づると思ふ黒闇々たる坂下より、もののぼるやうなれば、ここにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮もなさで社の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞ぎ、呼吸をころしてひそみたるに、四足のものの歩むけはひして、社の前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女のうつくしかりし顔、優かりし眼を忘れず。ここをわれに教へしを、今にして思へばかくれたる児どものありかにあらで、何らか恐しきもののわれを捕へむとするを、ここに潜め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯の火影あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方に走るを見つ。ほどなく引返してわがひそみたる社の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて来りし感あり。

あたかもその立留りし折から、別なる跫音、また坂をのぼりてさきのものと落合ひたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでもこの辺で見たといふものがあるんだが。」

とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男の声に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものの然はたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しさは一しほ増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃の方でも廻つて見よう、お前も頼む。」

「それでは。」といひて上下にばらばらと分れて行く。

再び寂としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思ふ顔少し差出だして、外の方をうかがふに、何ご

ともあらざりければ、やや落着きたり。怪しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚なる、と冷かに笑ひしに、思ひがけず、誰ならむたまぎる声して、あわてふためき遁ぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

大沼

「ゐないツて私あどうしよう、爺や。」

「根ツからゐさつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前様遊びに出します時、帯の結めを丁とたたいてやらつしやれば好いに。」

「ああ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかくれてそツと出て行つたろうではないかねえ。」

「それはハヤ不念なこんだ。帯の結めさへ叩いときや、何がそれで姉様なり、母様なりの魂が入るもんだで魔めはどうすることもしえないでござす。」

「さうねえ。」とものかなしげに語らひつつ、社の前をよこぎりたまへり。

走りいでしが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪みたる。

悔ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早やその姿は見えざりき。

涙ぐみて彳む時、ふと見る銀杏の木のくらき夜の空に、大なる円き影して茂れる下に、女の後姿ありてわが眼を遮りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼ばむとせしが、よしなきものに声かけて、なまじひにわが此処にあるを知られむは、拙きわざなればと思ひてやみぬ。

とばかりありて、その姿またかくれ去りつ。見えずなればなほなつかしく、たとへ恐しきものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化したる上は、われを捕へてむごからむや。さきなるはさもなくて、いま幻に見えたるがまことその人なりけむもわかざるを、何とて言はかけざりしと、打泣きしが、かひもあらず。

あはれさまざまのものの怪しきは、すべてわが眼のいかにかせし作用なるべし、さらずば涙にくもりしや、術こそありけれ、かなたなる御手洗にて清めてみばやと寄りぬ。

煤けたる行燈の横長きが一つ上にかかりて、ほととぎすの画と句など書いたり。灯をともしたるに、水はよく澄みて、青き苔むしたる石鉢の底もあきらかなり。手に掬ばむとしてうつむく時、思ひかけず見たるわが顔はそもそもいかなるものぞ。覚えず叫びしが心を籠めて、気を鎮めて、両の眼を拭ひ拭ひ、水に臨む。

われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかかるべき、必ず心の迷へるならむ、今こそ、今こそとわななきながら見直したる、肩をとらへて声ふるはし、

「お、お、千里。ええも、お前は。」と姉上ののたまふに、縋りつかまくみかへりたる、わが顔を見たまひしが、

「あれ！」

といひて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝と馳せ去りたまへり。

怪しき神のさまざまのことしてなぶるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いかけぬ。捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらものの口惜しければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大路と覚しき町にも出でたり、暗き径も辿りたり、野もよこぎりぬ。畦も越えぬ。あとをも見ずて駈けたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河の如く横はりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼とも覚しきが、前途を塞ぐと覚ゆる蘆の葉の繁きがなかにわが身体倒れたる、あとは知らず。

五位鷺

眼のふち清々しく、涼しき薫つよく薫ると心着く、身は柔かき蒲団の上に臥したり。やや枕をもたげて見る、竹縁の障子あけ放して、庭つづきに向ひなる山懐に、緑の草の、ぬれ色青く生茂りつ。その半腹にかかりある厳角の苔のなめらかなるに、一挺はだか蝋に灯ともしたる灯影すずしく、筧の水むくむくと湧きて玉ちるあたりに盥を据ゑて、うつくしく髪結うたる女の、身に一糸もかけで、むかうざまにひたりてゐたり。

筧の水はそのたらひに落ちて、溢れにあふれて、地の窪みに流るる音しつ。

蝋の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ちらちらと眼に映ずる雪なす膚白かりき。

わが寝返る音に、ふとこなたを見返り、それと頷く状にて、片手をふちにかけつつ片足を立てて盥のそとにいだせる時、颯と音して、烏よりは小さき鳥の真白きがひらひらと舞ひおりて、うつくしき人の脛のあたりをかすめつ。そのままおそれげもなう翼を休めたるに、ざぶりと水をあびせざま莞爾とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣もてその胸をば蔽へり。鳥はおどろきてはたはたと飛去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蝋を取りたるうつくしき人の姿さやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに縁の端に腰をおろすとともに、手をつきそらして捩向きざま、わがかほをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」

といひて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面だかく、眉あざやかに、瞳すずしく、鼻やや高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり※たけたり。こは予てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつくづくみまもりぬ。

またほほゑみたまひて、

「お前あれは斑猫といつて大変な毒虫なの。もう可いね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、あれでは姉様が見違へるのも無理はないのだもの。」

われもさあらむと思はざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふままに頷きつ。あたりのめづらしければ起きむとする夜着の肩、ながく柔かにおさへたまへり。

「ぢつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着いて、ね、気をしづめるのだよ、可いかい。」

われはさからはで、ただ眼をもて答へぬ。

「どれ。」といひて立つたる折、のしのしと道芝を踏む音して、つづれをまとうたる老夫の、顔の色いと赤きが縁近う入り来つ。

「はい、これはお児さまがござらつせえたの、可愛いお児じや、お前様も嬉しかろ。ははは、どりや、またいつものを頂きましよか。」

腰をななめにうつむきて、ひったりとかの筧に顔をあて、口をおしつけてごつごつごつとたてつづけにのみたるが、ふツといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれやれ甘いことかな。はい、参ります。」

と踵を返すを、こなたより呼びたまひぬ。

「ぢいや、御苦労だが。また来ておくれ、この児を返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答へて去る。山風颯とおろして、彼の白き鳥また翔ちおりつ。黒き盥のふちに乗りて羽づくろひして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静に雨戸をひきたまひき。

九ツ斫

やがて添臥したまひし、さきに水を浴びたまひし故にや、わが膚をりをり慄然たりしが何の心もなうひしと取縋りまゐらせぬ。あとをあとをといふに、をさな物語二ツ三ツ聞かせ給ひつ。やがて、

「一ツ斫、坊や、二ツ斫といへるかい。」

「二ツ斫。」

「三ツ斫、四ツ斫といつて御覧。」

「四ツ斫。」

「五ツ斫。そのあとは。」

「六ツ斫。」

「さうさう七ツ斫。」

「八ツ斫。」

「九ツ斫——ここはね、九ツ斫といふ処なの。さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉の如きその乳房をふくませたまひぬ。露に白き襟、肩のあたり鬢のおくれ毛はらはらとそみだれたる、かかるさまは、わが姉上とは太く違へり。乳をのまむといふを姉上は許したまはず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまふなり。母上みまかりたまひてよりこのかた三年を経つ。乳の味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似ざりき。垂玉の乳房ただ淡雪の如く含むと舌にきえて触るるものなく、すずしき唾のみぞあふれいでたる。

軽く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天井の上と覚し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず。ここにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わななき取つくを抱きしめつつ、

「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とキとのたまへば、やがてぞ静まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなほその響のうちにものの叫びたる声せしが耳に残りてふるへたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある蒔絵ものの手箱のなかより、一口の守刀を取出しつつ鞘ながら引そばめ、雄々しき声にて、

「何が来てももう恐くはない。安心してお寝よ。」とのたまふ、たのもしき状よと思ひてひたとその胸にわが顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残燈暗く床柱の黒うつややかにひかるあたり薄き紫の色籠めて、香の薫残りたり。枕をはづして顔をあげつ。顔に顔をもたせてゆるく閉たまひたる眼の睫毛かぞふるばかり、すやすやと寝入りてゐたまひぬ。ものいはむとおもふ心おくれて、しばし瞻りしが、淋しさにたへねばひそかにその唇に指さきをふれて見ぬ。指はそれて唇には届かでなむ、あまりよくねむりたまへり。鼻をやつままむ眼をやおさむとまたつくづくと打まもりぬ。ふとその鼻頭をねらひて手をふれしに空を捻りて、うつくしき人は雛の如く顔の筋ひとつゆるみもせざりき。またその眼のふちをおしたれど水晶のなかなるものの形を取らむとするやう、わが顔はそのおくれげのはしに頬をなでらるるまで近々とありながら、いかにしても指さきはその顔に届かざるに、はては心いれて、乳の下に面をふせて、強く額もて圧したるに、顔にはただあたたかき霞のまとふとばかり、のどかにふはふはとさはりしが、薄葉一重の支ふるなく着けたる額はつと下に落ち沈むを、心着けば、うつくしき人の胸は、もとの如く傍にあをむきゐて、わが鼻は、いたづらにおのが膚にぬくまりたる、柔き蒲団に埋れて、をかし。

渡船

夢幻ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまひし元のまま柔かに力なげに蒲団のうへに垂れたまへり。

片手をば胸にあてて、いと白くたをやかなる五指をひらきて黄金の目貫キラキラとうつくしき鞘の塗の輝きたる小さき守刀をしかと持つともなく乳のあたりに落して据ゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼のほほ笑む如き、髪のさらさらしたる、枕にみだれかかりたる、それも違はぬに、胸に剣をさへのせたまひたれば、亡き母上のその時のさまに紛ふべくも見えずなむ、コハこの君もみまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除けなむと、胸なるその守刀に手をかけて、つと引く、せつぱゆるみて、青き光眼を射たるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐さとほとばしりぬ。眼もくれたり。したしたとながれにじむをあなやと両の拳もてしかとおさへたれど、留まらで、たふたふと音するばかりぞ淋漓としてながれつたへる、血汐のくれなゐ衣をそめつ。うつくしき人は寂として石像の如く静なる鳩尾のしたよりしてやがて半身をひたし尽しぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、燈にすかす指のなかの紅なるは、人の血の染みたる色にはあらず、訝しく撫で試むる掌のその血汐にはぬれもこそせね、こころづきて見定むれば、かいやりし夜のものあらはになりて、すずしの絹をすきて見ゆるその膚にまとひたまひし紅の色なりける。いまはわれにもあらで声高に、母上、母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかしたりしが、効なくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝たりと覚し。顔あたたかに胸をおさるる心地に眼覚めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫の背に負はれて、とある山路を行くなりけり。うしろよりは彼のうつくしき人したがひ来ましぬ。

さてはあつらへたまひし如く家に送りたまふならむと推はかるのみ、わが胸の中はすべて見すかすばかり知りたまふやうなれば、わかれの惜しきも、ことのいぶかしきも、取出でていはむは益なし。教ふべきことならむには、彼方より先んじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に帰るべきわが運ならば、強ひて止まらむと乞ひたりとて何かせん、さるべきいはれあればこそ、と大人しう、ものもいはでぞ行く。

断崖の左右に聳えて、点滴声する処ありき。雑草高き径ありき。松柏のなかを行く処もありき。きき知らぬ鳥うたへり。褐色なる獣ありて、をりをり叢に躍り入りたり。ふみわくる道とにもあらざりしかど、去年の落葉道を埋みて、人多く通ふ所としも見えざりき。

をぢは一挺の斧を腰にしたり。れいによりてのしのしとあゆみながら、茨など生ひしげりて、衣の袖をさへぎるにあへば、すかすかと切つて払ひて、うつくしき人を通し参らす。されば山路のなやみなく、高き塗下駄の見えがくれに長き裾さばきながら来たまひつ。

かくて大沼の岸に臨みたり。水は漫々として藍を湛へ、まばゆき日のかげも此処の森にはささで、水面をわたる風寒く、颯々として声あり。をぢはここに来てソとわれをおろしつ。はしり寄れば手を取りて立ちながら肩を抱きたまふ、衣の袖左右より長くわが肩にかかりぬ。

蘆間の小舟の纜を解きて、老夫はわれをかかへて乗せたり。一緒ならではと、しばしむづかりたれど、めまひのすればとて乗りたまはず、さらばとのたまふはしに棹を立てぬ。船は出でつ。わツと泣きて立上りしがよろめきてしりゐに倒れぬ。舟といふものにははじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後にゐたまへりとおもふ人の大なる環にまはりて前途なる汀にゐたまひき。いかにして渡し越したまひつらむと思ふときハヤ左手なる汀に見えき。見る見る右手なる汀にまはりて、やがて旧のうしろに立ちたまひつ。箕の形したる大なる沼は、汀の蘆と、松の木と、建札と、その傍なるうつくしき人ともろともに緩き環を描いて廻転し、はじめは徐ろにまはりしが、あとあと急になり、疾くなりつ、くるくるくると次第にこまかくまはるまはる、わが顔と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき処に松の木にすがりて見えたまへる、とばかりありて眼の前にうつくしき顔の※たけたるが莞爾とあでやかに笑みたまひしが、そののちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き汀に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶けて船より出だしつ。またその背を向けたり。

「泣くでねえ泣くでねえ。もうぢきに坊ツさまの家ぢや。」と慰めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いふもかひなくてただ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿の如くうちかけらるるやう肩に負はれて、顔を垂れてぞともなはれし。見覚えある板塀のあたりに来て、日のややくれかかる時、老夫はわれを抱き下して、溝のふちに立たせ、ほくほく打ゑみつゝ、慇懃に会釈したり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」

といひずてに何地ゆくらむ。別れはそれにも惜しかりしが、あと追ふべき力もなくて見おくり果てつ。指す方もあらでありくともなく歩をうつすに、頭ふらふらと足の重たくて行悩む、前に行くも、後ろに帰るも皆見知越のものなれど、誰も取りあはむとはせで往きつ来りつす。さるにてもなほものありげにわが顔をみつつ行くが、冷かに嘲るが如く憎さげなるぞ腹立しき。おもしろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直りて、とぼとぼとまた山ある方にあるき出しぬ。

けたたましき跫音して鷲掴に襟を掴むものあり。あなやと振返ればわが家の後見せる奈四郎といへる力逞ましき叔父の、凄まじき気色して、

「つままれめ、何処をほツつく。」と喚きざま、引立てたり。また庭に引出して水をやあびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに、おさへたる手をゆるべず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背を拍ちて宙につるしながら、走りて家に帰りつ。立騒ぐ召つかひどもを叱りつも細引を持て来さして、しかと両手をゆはへあへず奥まりたる三畳の暗き一室に引立てゆきてそのまま柱に縛めたり。近く寄れ、喰さきなむと思ふのみ、歯がみして睨まへたる、眼の色こそ怪しくなりたれ、逆つりたる眦は憑きもののわざよとて、寄りたかりて口々にののしるぞ無念なりける。

おもての方さざめきて、何処にか行きをれる姉上帰りましつと覚し、襖いくつかぱたぱたと音してハヤここに来たまひつ。叔父は室の外にさへぎり迎へて、

「ま、やつと取返したが、縄を解いてはならんぞ。もう眼が血走つてゐて、すきがあると駈け出すぢや。魔どのがそれしよびくでの。」

と戒めたり。いふことよくわが心を得たるよ、しかり、隙だにあらむにはいかでかここにとどまるべき。

「あ。」とばかりにいらへて姉上はまろび入りて、ひしと取着きたまひぬ。ものはいはでさめざめとぞ泣きたまへる、おん情手にこもりて抱かれたるわが胸絞らるるやうなりき。

姉上の膝に臥したるあひだに、医師来りてわが脈をうかがひなどしつ。叔父は医師とともに彼方に去りぬ。

「ちさや、どうぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様はどうしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」

といきつくづくぢつとわが顔をみまもりたまふ、涙痕したたるばかりなり。

その心の安んずるやう、強ひて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おお、薄気味が悪いねえ。」

と傍にありたる奈四郎の妻なる人呟きて身ぶるひしき。

やがてまた人々われを取巻きてありしことども責むるが如くに問ひぬ。くはしく語りて疑を解かむとおもふに、をさなき口の順序正しく語るを得むや、根問ひ、葉問ひするに一々説明かさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつつ心に何をかいひたる。

やうやくいましめはゆるされたれど、なほ心の狂ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人の疑を増すをいかにせむ。ひしと取籠めて庭にも出さで日を過しぬ。血色わるくなりて痩せもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後見の叔父夫婦にはいとせめて秘しつつ、そとゆふぐれを忍びて、おもての景色

見せたまひしに、門辺にありたる多くの児ども我が姿を見ると、一斉に、アレさらはれものの、気狂の、狐つきを見よやといふいふ、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不断親しかりし朋達なり。

姉上は袖もてわれを庇ひながら顔を赤うして遁げ入りたまひつ。人目なき処にわれを引据ゑつと見るまに取つて伏せて、打ちたまひぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわただしく背をばさすりて、

「堪忍しておくれよ、よ、こんなかはいさうなものを。」

といひかけて、

「私あもう気でも違ひたいよ。」としみじみと掻口説きたまひたり。いつのわれにはかはらじを、何とてさはあやまるや、世にただ一人なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、気を確に、心を鎮めよ、と涙ながらいはるるにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやうそのたびになりまさりて、果はまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。

たとへば怪しき糸の十重二十重にわが身をまとふ心地しつ。しだいしだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思あり。それをば刈払ひ、遁出でむとするにその術なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を顰め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂ひなどするにぞ、気あがり、心激し、ただじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。

口惜しく腹立たしきまま身の周囲はことごとく敵ぞと思わるる。町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何らのものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見てその弟を忘れしことあり。塵一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化したるにて、恐しきあやしき神のわれを悩まさむとて現じたるものならむ。さればぞ姉がわが快復を祈る言もわれに心を狂はすやう、わざとさはいふならむと、一たびおもひては堪ふべからず、力あらば恣にともかくもせばやせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、掻むしらむ、透あらばとびいでて、九ツ窈とをしへたる、たうときうつくしきかのひとの許に遁げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、ふたたび暗室にいましめられぬ。

千呪陀羅尼

毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいへば、たけりくるひ、罵り叫びてあれたりしが、つひには声も出でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりしを、うつらうつら舁きあげられて高き石壇をのぼり、大なる門を入りて、赤土の色きれいに掃きたる一条の道長き、右左、石燈籠と石榴の樹の小さきと、おなじほどの距離にかはるがはる続きたるを行きて、香の薫しみつきたる太き円柱の際に寺の本堂に据ゑられつ、卜思ふ耳のはたに竹を破る響きこえて、僧ども五三人一斉に声を揃へ、高らかに誦する声耳を聾するばかり喧ましさ堪ふべからず、禿顱ならびゐる木のはしの法師ばら、何をかすると、拳をあげて一人の天窓をうたむとせしに、一幅の青き光颯と窓を射て、水晶の念珠瞳をかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞まる時、若僧円柱をいざり出でつつ、ついゐて、サラサラと金襴の帳を絞る、燦爛たる御厨子のなかに尊き

像こそ拝まれたれ。一段高まる経の声、トタンにはたたがみ天地に鳴りぬ。

端厳微妙のおんかほばせ、雲の袖、霞の袴ちらちらと瓔珞をかけたまひたる、玉なす胸に繊手を添へて、ひたと、をさなごを抱きたまへるが、仰ぐ仰ぐ瞳うごきて、ほほゑみたまふと、見たる時、やさしき手のさき肩にかかりて、姉上は念じたまへり。

滝やこの堂にかかるかと、折しも雨の降りしきりつ。渦いて寄する風の音、遠き方より呻り来て、どつと満山に打あたる。

本堂青光して、はたたがみ堂の空をまろびゆくに、たまぎりつつ、今は姉上を頼までやは、あなやと膝にはひあがりて、ひしとその胸を抱きたれば、かかるものをふりすてむとはしたまはで、あたたかき腕はわが背にて組合はされたり。さるにや気も心もよわよわとなりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降りのなかに陀羅尼を呪する聖の声々さわやかに聞きとられつ。あはれに心細くもの凄きに、身の置処あらずなりぬ。からだひとつ消えよかしと両手を肩に縋りながら顔もてその胸を押しわけたれば、襟をば掻きひらきたまひつつ、乳の下にわがつむり押入れて、両袖を打かさねて深くわが背を蔽ひ給へり。御仏のそのをさなごを抱きたまへるもかくこそと嬉しきに、おちゐて、心地すがすがしく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪もはてたる。雷の音も遠ざかる。わが背をしかと抱きたまへる姉上の腕もゆるみたれば、ソとその懐より顔をいだしてこはごはその顔をば見上げつ。うつくしさはそれにもかはらでなむ、いたくもやつれたまへりけり。雨風のなほはげしく外をうかがふことだにならざる、静まるを待てば夜もすがら暴通しつ。家に帰るべくもあらねば姉上は通夜したまひぬ。その一夜の風雨にて、くるま山の山中、俗に九ツ岳といひたる谷、あけがたに杣のみいだしたるが、忽ち淵になりぬといふ。

里の者、町の人皆挙りて見にゆく。日を経てわれも姉上とともに来り見き。その日一天うららかに空の色も水の色も青く澄みて、軟風おもむろに小波わたる淵の上には、塵一葉の浮べるあらで、白き鳥の翼広きがゆたかに藍碧なる水面を横ぎりて舞へり。

すさまじき暴風雨なりしかな。この谷もと薬研の如き形したりきとぞ。

幾株となき松柏の根こそぎになりて谷間に吹倒されしに山腹の土落ちたまりて、底をながるる谷川をせきとめたる、おのづからなる堤防をなして、凄まじき水をば湛へつ。一たびこのところ決潰せむか、城の端の町は水底の都となるべしと、人々の恐れまどひて、怠らず土を装り石を伏せて堅き堤防を築きしが、あたかも今の関屋少将の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、嫩なりし常磐木もハヤ丈のびつ。草生ひ、苔むして、いにしへよりかかりけむと思ひ紛ふばかりなり。

あはれ礫を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血気なる友のいたづらを叱り留めつ。年若く面清き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧を湛へたる淵に臨みて粛然とせり。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
　　1987（昭和62）年9月16日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第三巻」岩波書店
　　1941（昭和16）年12月
初出：「文芸倶楽部」
　　1896（明治29）年11月
入力：砂場清隆
校正：松永正敏
2000年8月30日公開
2005年12月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竜潭譚

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/